

# 肺炎、マラリア…多発

パプアニューギニア津波災害

中原看護婦が報告



## 「AMDA」医療チーム救援活動 5日間で300人診察

パプアニューギニアで七月十七日に発生した地震による津波災害の救援活動を実施したNGO「AMDA」(アジア医師連絡協議会)の医療チームがこのほど帰国。救援活動に加わった看護婦の中原美佳さん(31)大阪府吹田市在住が岡山市榑津のAMDA本部で記者会見を行い、現地での状況を伝えた。

中原看護婦はAMDAの医療チーム第一陣として、医師二人とともに七月二十三日、震源地に近い都市アイタベ(首都ポートモレスビーから北西約九百キロ)入り。二十五日から五日間にわたって、アイタベの西約十六キロのマロール地区(人口約三千人)内にある診療所で医療活動に従事した。この診療所は物資不足で九カ月前から閉鎖され、医師がおらず、パプアニューギ

ニアの衛生兵とともに医療を行った。

中原看護婦によると、被災者の家の多くが津波で流されたため山の中で避難生活。患者は、津波で海水を飲んだことによる肺炎やテリヤなどを発症。負傷後の傷が化のうしたり、下痢の症状を訴える患者も多かったという。

また、腐乱した遺体が沼地や川などにあるため、大腸菌が繁殖し衛生状態も悪化していた。医療チームは五日間で延べ約三百人の患者を診察し、投薬や外科処置をほとんどした。

現地では約二百人が死亡し、約九千二百人が負傷。AMDAは第二陣(医師一人、レントゲン技師一人)、第三陣(調整員一人)を派遣し、医療活動や物資の補給を実施。いずれも八月二日までに緊急救援活動を終え、帰国した。

記者会見で現地での医療活動について説明する中原美佳看護婦

